

表現力に必要な基礎的な知識・技能についての考察

美術科 西澤 明

はじめに

昨年度の本校研究紀要、拙稿において、美術の授業における現在の子どもの問題点として、次のような点を明らかにした。

第1は、画材や材料、技法についての基礎的な知識・技能についての理解、定着が大きく不足している子どもが多くなっている点である。特に表現活動における制作に関わる技能については、活動を行う上で最低限必要と考えられる事柄、例えば「描く」「塗る」「切る」「貼る」といった作業が確実に行えない子どもが多く、それに伴って作品の完成度が一昔前にくらべて著しく低下しているように思われる。

第2は、制作意図について具体的、視覚的なイメージを持つ子どもが多くなっているが、そのイメージが子ども自身の発想に基づくものではなく、出来合いの商・工業製品の模倣や、キャラクターをもとにした発想による場合が多い点である。それは表面的に高度な美しさや仕上がりを求める傾向でもあり、第1の問題点で指摘した不十分な基礎的な知識・技能によって作られる実際の作品とは、大きな隔たりが生じることになっている。

第3は、自分がイメージした作品の具体化、実現に向けた試行錯誤を行う子どもが少なくなっている点である。自らの創意工夫で材料の選択や技法を考え、その活動の中から学ぶのではなく、安易に教師の指示を仰ぎ、準備されたものだけで作業を済ませようとする子どもが多くなっている。子どもたちがよく使う「面倒くさい」という言葉は、まさしくその表れだと思われる。

最近の子どもたちの多くに、「短時間かつ簡単な方法で作品を完成させようとする」傾向があり、「マニュアル化された作業には集中して取り組める」半面、「時間をかけて自分の意図を実現する姿勢が乏しい」といった姿が見られるのである。

こうした問題点についてはそれぞれが深く関わっていると考えられる。つまり、表現活動に当たって子どもたちの多くが高度な仕上がりをイメージするが、基礎的な知識・技能の理解、定着が不足しているためにそのイメージの実現は困難であり、そのために、ただでさえじっくり取り組むことが苦手な子どものやる気は急速に低下し、取り組みもいい加減になる。いい加減に取り組めば作品の状況はさらに悪くなる…。こうした悪循環は、美術嫌いの子どもの作ることにもつながっていると考えられるのである。

1. テーマ設定にあたって

(1) 目標、評価規準との結びつき

前述の3つの問題点を評価の観点に照らして考えてみると、第1の問題点「基礎的な知識・技能の能力の不足」については「創造的な技能」の弱さ、第2の問題点「既成のイメージ主体で自身の発想力の不足」については「発想・構想の能力」の弱さ、第3の問題点「試行錯誤を面倒くさがり、安易に結果を求める傾向」については「美術への関心・意欲・態度」の弱さとして捉えることができるだろう。つまりこれらは美術科の表現活動における評価の基本的観点であり、言い換えれば表現活動において目標とすべき内容の全般において、子どもの能力の弱さが見られるとも言えるのである。

(2) 「基礎的な知識・技能」習得の優位性

こうした問題に対する取り組みは、当然活動の中で常に考え続け、授業実践に向かっているわけだが、研究課題としては、ここ数年は第1の問題点「基礎的な知識・技能の能力の不足」に焦点を絞り、

表現活動における基礎的知識・技能の内容の明確化と、その内容の確実な定着に向けた授業のあり方について考察を続けてきている。これは第2の問題点「既成のイメージ主体で自身の発想力の不足」、第3の問題点「試行錯誤を面倒くさがり、安易に結果を求める傾向」が個々の子どもの資質や経験に基づく側面が強いのにに対し、基礎的な知識・技能については、授業という学校教育の集団活動の場においてその習得が期待できることに拠っている。加えて、授業という集団活動もまた、子どもの経験として積み重ねられていることは明らかであり、その内容の工夫によって、第2、第3の問題に対する取り組みとしても十分成果が期待できるとも考えるからである。

(3) 小・中連携に向けた必要性

本年度の本校研究では、「小・中の連携を見据えた中学校教育」のあり方を研究の副題として設定している。これまでに図画工作科、美術科が行ってきた教育活動を振り返るとき、小学校6年間、中学校3年間、計9年間という十分な時間にも拘らず、必ずしも体系的な知識・技能の習得は行われてきていないように思われる。その原因は、子どもの発達段階の違い、それぞれに求められている目標の違いや考え方の違い、個々の教師に委ねられる活動内容の比重が大きいという教科の特性、これまでの歴史による普遍化など、さまざまに考えられるが、美術科において「図画工作科における知識・技能学習の不足」がしばしば話題に挙がることから、小・中学校9年間を通した知識・技能学習の関連付けや体系化は、今後大いに必要になってくると考えられるのである。

2. 基礎的な知識・技能を意識した授業実践

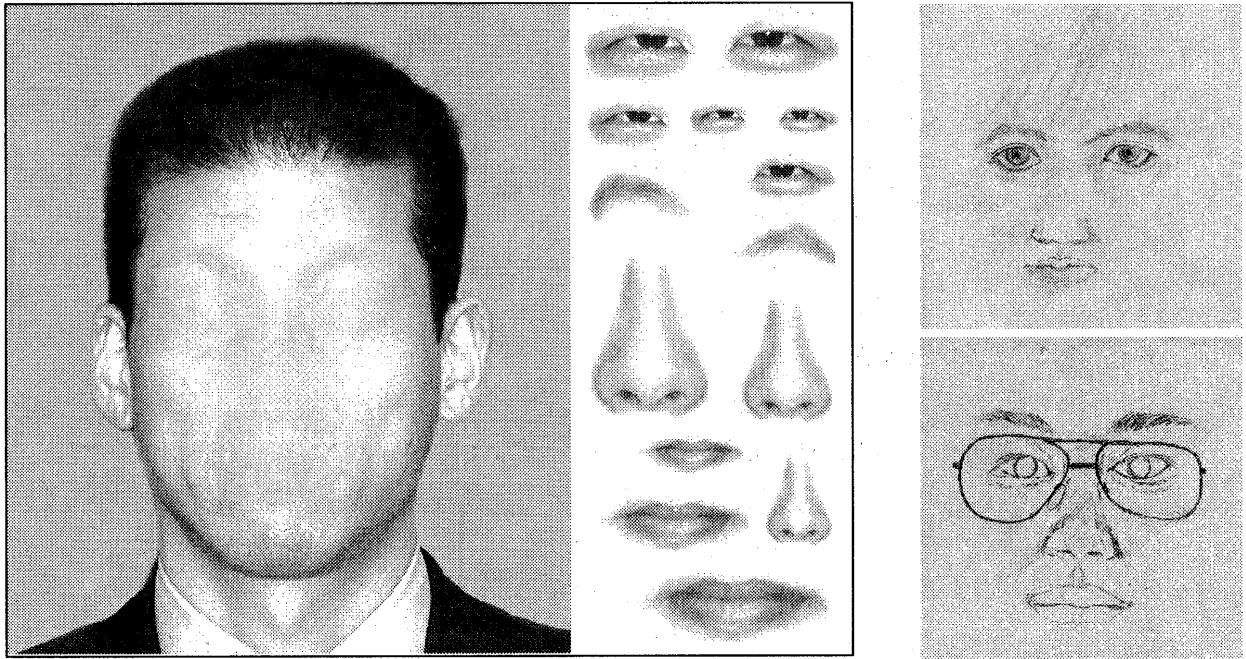
「自分を見つめる」

1年生後期で行う教材。鏡で自分の顔を観察し、鉛筆でスケッチする、きわめてオーソドックスな活動。自画像教材のねらいとしては、活動を通して「心の働き」の伸長を設定することはもちろん大切だが、ここでは、何気なく思い込みで表現しがちな対象をじっくり観るための観点、鉛筆の基礎的な知識と使用方法および幅広い線の表現を基礎的技能として位置づけている。

観察の対象については頭部に絞り、中学生の発達段階に多く見られる「似させたい」という思いを実現するための方法をパソコン処理による副笑いによって学習し、形、大きさ、位置、角度といった基礎的な観方をまとめている。

鉛筆によるスケッチは、鉛筆の幅広い線の表現を十分に理解した上で、それを意識的に活用し、生かす能力の育成を目的としている。

| 活 動 内 容 | 学習が期待できる基礎的知識・技能 | 育成が期待できる力や感性 |
|----------------|--|----------------------------|
| ・鉛筆についての学習 | ・鉛筆の成り立ちや原材料、種類など | ・身近な道具に対する愛着 |
| ・カッターナイフで鉛筆を削る | ・カッターナイフの構造と取り扱いの注意点 ・鉛筆を削る方法 | ・刃物に対する道具としての意識 |
| ・鉛筆で線を描く | ・鉛筆で実現できる線の表現 濃淡、強弱、硬軟、長短、太細速遅、広狭、多少など、 | ・表現の幅を広げるための、道具の扱いに対する創意工夫 |
| ・対象の観方の学習 | ・正確に対象を写し取るための観方 形、大きさ、位置、角度 | ・思い込みによる描写からの脱却 |

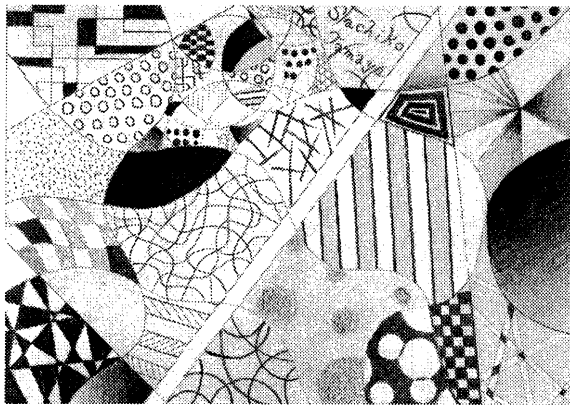
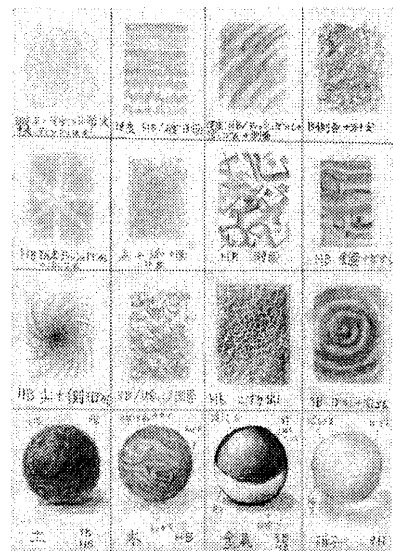
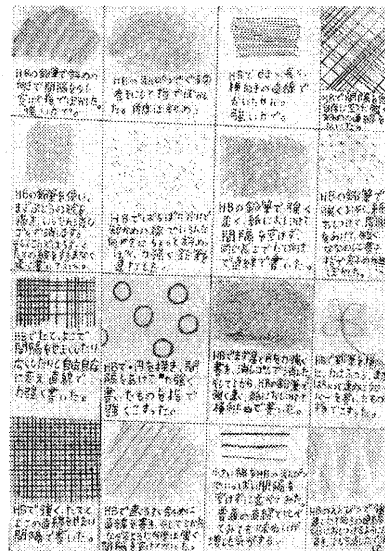
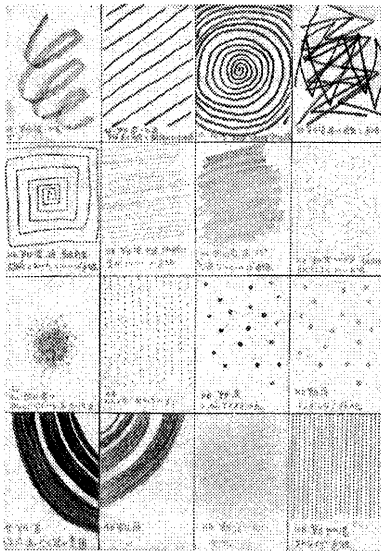


「鉛筆の技法を考えた絵画」

美術科の活動でその使用頻度が高いにもかかわらず、使用の意義についての理解が低い鉛筆を、美術教育における基礎的な描画用具の一つとして位置づけ、その独自性や機能を見直そうと考案、実施した教材。前述の「自分を見つめる」単元における鉛筆の線が持つ幅広い表現の学習をさらに発展させた教材として実施している。鉛筆の歴史、原材料、種類など、さまざまな知識の学習を行ったのち、その表現の幅の可能性についてワークシート作品を制作しながらさまざまな技法を実際に行い、まとめる。その活動中には芯の形状を整えるためにカッターを使って鉛筆を削る取り組みも行っている。

さまざまな基礎的技法について学んだのち、それらの技法を意識的にできるだけ用いた描画で作品をまとめていく。前述のカレンダー制作と同様に、画用紙に直接描画する方法と、別の用紙に施した鉛筆の表現を切り出して画用紙に構成し、貼りつける方法によって制作する。

| 活動内容 | 学習が期待できる基礎的知識・技能 | 育成が期待できる力や感性 |
|------------------|---|--|
| ・鉛筆についての学習 | ・鉛筆の成り立ちや原材料、種類など | ・身近な道具に対する愛着 |
| ・さまざまな技法のまとめ | ・カッターを使って鉛筆を削る方法 ・鉛筆で実現できる表現とその技法 濃淡，強弱，硬軟，長短，太細， 速遅，広狭，多少など | ・創意工夫による表現方法の拡大 ・技法を意識した表現活動への取り組み |
| ・さまざまな技法を用いた作品制作 | | ・単純な道具による幅広い表現の可能性への理解 ・白黒の諧調による美しさへの理解 |
| ・サイン記入 | | ・サインを入れることによる作品の視覚的効果 |
| ・展示，鑑賞 | | ・生活の中に美術作品が置かれる楽しさ |



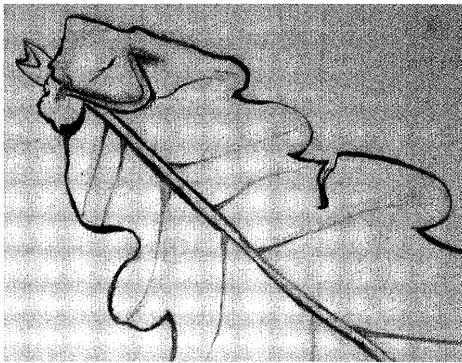
「柏葉のスケッチ」

本校の校章である柏葉をモチーフにした、鉛筆によるスケッチと水性絵の具による着彩の教材で、3年生で実施している。本校ではここ数年、卒業アルバムの扉ページに掲載する作品を子どもたちの作品の中から選んでおり、そのための制作。オーソドックスな活動であるが、対象の観方については、前述の顔のスケッチのように単に形や色を観るだけでなく、強弱、硬軟、鈍さ鋭さ、寒暖といった、目に見えない事柄を観る（感じる）ことの意味を学習の中心に置いている。

鉛筆および水性絵の具による表現については、この活動以前、1、2年生時にその表現の幅広さの学習を積み重ねてきており、その確認、復習としての位置づけになる。

| 活動内容 | 学習が期待できる基礎的知識・技能 | 育成が期待できる力や感性 |
|--------------|---|--|
| ・ 柏葉の観察 | ・ 感触や、目には見えない強弱、硬軟、鈍さ鋭さ、寒暖などを観点とした観方 | ・ 自然物が持つ形や美しさを感じる感性 ・ 感性でものを観る姿勢 |
| ・ 鉛筆によるスケッチ | ・ 感触や目には見えない事柄を、道具の表現の幅広さと結びつけて表す方法 | ・ 技法を意識した表現活動への取り組み |
| ・ 水性絵の具による着彩 | ・ 混色、重色による幅広い色の表現方法 ・ 筆の使用法の工夫による幅広い表現方法 | ・ 知識・技能を選択、組み合わせして、表現意図を実現しようとする前向きな姿勢 |

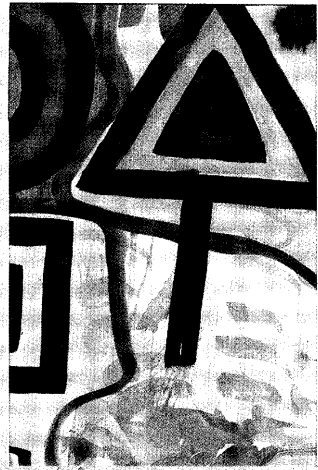
| | | |
|--|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・展示，鑑賞 | | <ul style="list-style-type: none"> ・単純な対象に対する，一人ひとりの感じ方，表現方法の違いを認め合う姿勢 |
|--|--|---|



「絵の具遊びから作る絵画作品」

1年生の入学後すぐに，新しく購入する水性絵の具（アクリルガッシュ）の道具確認と，新しい材料・道具の使い初めにあたってのためらいを払拭するために実施している教材。教師が出す「米粒くらいの絵の具を，筆にたっぷりの水3杯で溶く」「丸を3個描く」といった指示に従って，画用紙（スケッチブック）に水性絵の具でさまざまな色や形を描画していき，最終的にできあがった絵の具の痕跡（模様）の集積から気に入った部分の矩形を取り出し，紙縁枠に入れて作品化するもの。

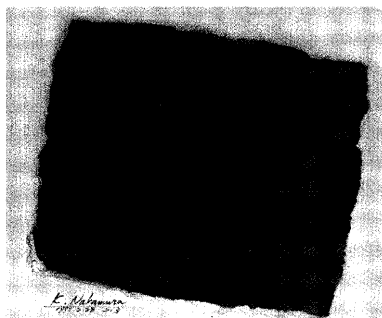
| 活動内容 | 学習が期待できる基礎的知識・技能 | 育成が期待できる力や感性 |
|--|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・水性絵の具による具体的な指示に従った描画 | <ul style="list-style-type: none"> ・絵の具を溶く水の量の違いによるその状態 ・単位面積を塗るのに必要なおおよその絵の具の量 ・使用する筆の違いによる筆跡の違い ・透過性が強い絵の具の重色による表現効果 ・不透明な絵の具の重色による表現効果 ・暗色上に置かれた明色の発色効果 | <ul style="list-style-type: none"> ・好きな色，形，大きさ，位置など，構成に係る要素を自分で決定する力 ・色，形，大きさ，位置など，構成に係る要素によって均衡の取れた画面構成を行う力 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・カッターの学習 ・カッターによる作品，紙枠の切断 | <ul style="list-style-type: none"> ・カッターの仕組み，使用上の注意 ・定規を当ててカッターで直線を切る方法 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・サイン記入 | | <ul style="list-style-type: none"> ・サインを入れることによる作品の視覚的效果 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・展示，鑑賞 | <ul style="list-style-type: none"> ・縁枠を使用した作品の展示方法 | <ul style="list-style-type: none"> ・気軽に美術作品を創る楽しさ ・生活の中に美術作品が置かれる楽しさ |



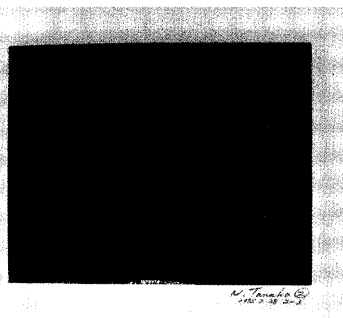
「さまざまな水性絵の具の表現を用いたカレンダー制作」

上記「絵の具遊びから作る絵画作品」の発展形として、水性絵の具を用い、より自由な発想で美しい色の組み合わせや構成を行う教材。カレンダーが印刷された画用紙に直接描画する方法と、別の用紙に施した（絵の具遊びによる）絵の具の痕跡（模様）の集積から気に入った部分を切り出し、カレンダーが印刷された画用紙に貼りつける方法によって制作する。授業時数や子どもの状態に応じてカレンダーの枚数を3枚（4ヶ月毎）、4枚（3ヶ月毎）、6枚（2ヶ月毎）と変えられるよさがある。

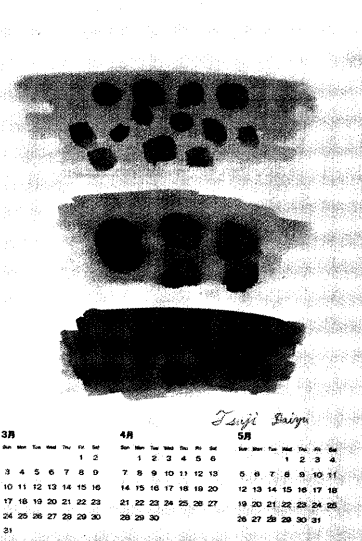
| 活動内容 | 学習が期待できる基礎的知識・技能 | 育成が期待できる力や感性 |
|---------------------|---|---|
| ・水性絵の具による自由な発想による描画 | ・さまざまな状態の絵の具，使用する筆などの組み合わせによる幅広い表現とその方法 | ・発想力と，それを実現しようとする創意工夫 ・やり直しができない緊張感と，真剣な取り組み（直接描画） |
| ・台紙への作品貼りつけ | ・スティック糊の効果的な使用方法 | ・より美しい仕上がりに向けたこだわり |



| | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 10 | 11 |
| SUN MON TUE WED THU FRI SAT | SUN MON TUE WED THU FRI SAT |
| 1 2 3 4 5 6 7 | 1 2 3 4 |
| 8 9 10 11 12 13 14 | 5 6 7 8 9 10 11 |
| 15 16 17 18 19 20 21 | 12 13 14 15 16 17 18 |
| 22 23 24 25 26 27 28 | 19 20 21 22 23 24 25 |
| 29 30 31 | 26 27 28 29 30 |



| | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 12 | 1 |
| SUN MON TUE WED THU FRI SAT | SUN MON TUE WED THU FRI SAT |
| 1 2 | 1 2 3 4 5 6 |
| 3 4 5 6 7 8 9 | 7 8 9 10 11 12 13 |
| 10 11 12 13 14 15 16 | 14 15 16 17 18 19 20 |
| 17 18 19 20 21 22 23 | 21 22 23 24 25 26 27 |
| 24 25 26 27 28 29 30 | 28 29 30 31 |



| | | |
|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| 3月 | 4月 | 5月 |
| SUN MON TUE WED THU FRI SAT | SUN MON TUE WED THU FRI SAT | SUN MON TUE WED THU FRI SAT |
| 1 2 | 1 2 3 4 5 6 | 1 2 3 4 |
| 3 4 5 6 7 8 9 | 7 8 9 10 11 12 13 | 5 6 7 8 9 10 11 |
| 10 11 12 13 14 15 16 | 14 15 16 17 18 19 20 | 12 13 14 15 16 17 18 |
| 17 18 19 20 21 22 23 | 21 22 23 24 25 26 27 | 19 20 21 22 23 24 25 |
| 24 25 26 27 28 29 30 | 28 29 30 | 26 27 28 29 30 31 |
| 31 | | |

「表札のレタリング」

自分の名前から三文字（漢字もしくは仮名）を選び、レタリング字典を手本に、10cm×30cmのシナベニヤ板材に拡大転写を行ったのち、水性絵の具（アクリルガッシュ）で着彩を行う教材。完成後は一斉に教室前の廊下に掲示し、学級の構成メンバーの表札とする。

全学年同じ材料、描画用具で活動を行うが、1年時にはゴシック体を用い、絵の具をムラなくはみ出さずに塗ることを目標にし、2年時には色の学習を踏まえたのち、明朝体を用い、1年時の目標に加え、美しい色の組み合わせの実現を目標にしている。3年時には、手本を変形する方法を学習したのち、それまでの着彩の活動で学んだ知識・技能を総合的に使った自由な発想による作品を制作している。完成後に掲示された作品を自由に見られることから、上級学年の技能への憧れとともに、次年度の自身の制作に向けた目標を具体的に立てることができるよさがある。

| 活 動 内 容 | 学習が期待できる基礎的知識・技能 | 育成が期待できる力や感性 |
|---|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・手本文字の拡大転写 ・手本文字の変形（3年時） | <ul style="list-style-type: none"> ・手本を転写する方法（方眼の基準線を使用した観方、かき方） ・変形の方法（方眼上の座標を用いた位置の観方） | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・色の学習（2年時） ・色の決定 | <ul style="list-style-type: none"> ・色の科学的分類（色の三属性）、性質に関する知識（2年時） | <ul style="list-style-type: none"> ・色の選択、使用における科学的な思考 ・美しい色の組み合わせに対する自分の嗜好の確認 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・アイデアのまとめ | | <ul style="list-style-type: none"> ・資質や経験によって身に付けた知識・技能の選択と再構成をもとにした発想の能力 ・より高度なものを求めようとする意欲 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・水性絵の具による着彩 | <ul style="list-style-type: none"> ・板に着彩する際の、紙のそれとの差異 ・ムラのない着彩のための絵の具の扱い（分量、濃度、混ぜ方など） ・はみ出さないための筆の扱い（選択、運筆など） | <ul style="list-style-type: none"> ・背景と図という積層的な観方と並列的な観方の使い分けができる感性 ・資質や経験によって身に付けた知識・技能の選択と再構成をもとにした構想実現の能力（3年時） |
| <ul style="list-style-type: none"> ・展示 ・鑑賞 | | <ul style="list-style-type: none"> ・生活の中に美術作品が置かれる楽しさ ・集団への所属と寄与の意識 ・より高い目標を目指す意識 |



1年生



1年生



2年生



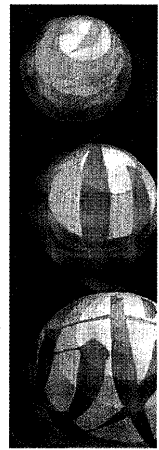
2年生



3年生



3年生



3年生

3. まとめ

一人ひとりの子どもは、それぞれ異なった経験を積み重ねて成長してきており、その感じ方、考え方は当然すべて違うものといえる。美術科の活動において必要な能力、こと表現活動において必要な能力を本稿の主題とした「表現力」とするなら、表現力もまた子どもたち一人ひとりすべてが違うものといえる。つまり、表現活動における子どもたちの感じ方や嗜好、意図、方法などは、一人ひとりすべて違うということが大前提になっている。

中学生の発達段階においては、他者との比較や情報交換が頻繁に行われるようになり、本来個人が持つ表現力とは異なった、画一的な嗜好や意図を持つ場合が多々見られる。そのため、その画一的な欲求の実現に必要な表現力の差が、即他者との相対的な評価につながってしまい、関心、意欲の低下として現れる場合も少なくない。こうした傾向は、ある意味問題ではあるが、学校教育における美術の活動が同じ時間、場所、内容の活動を行うという制約のもとで行われる以上、逆にそうした要求に応える形で学習させる事項を決定していくことも必要であり、有効であるとも考えられるだろう。そのためには、子どもたちの表現力を注意深く観察し、必要と思われる知識・技能を具体的にすること、さらにその内容を小学校段階から体系的に学習することができればと考える。

ここ数年の取り組みでは、絵画領域についての考察が先行しており、他の領域についてはまだまだこれからの段階である。その点については今後の課題として継続していきたいと考えている。